都市公園の抱える問題と課題
～癒しのサスティナブルパークをめざして～

広島工業大学工学部都市建設工学科　正会員　今川朱美
広島工業大学大学院建設工学専攻　学生会員　○渡部洋樹

1.はじめに

都市公園では、浮浪者があふれ、犯罪も多く、憩いの場であるべき都市の空間が、危険性を備えた空間となりつつある。このような都市・社会の状況下で、はたして公園は必要なのか？都市公園のような、大きな緑の空間が犯罪の温床になってしまうのは、人が集積しているはずの都市において、人目のない空間であるからだという指摘もある。商業施設や周囲の住宅と抱き合わせで再開発を行うことが改善策と考えられているが、依然、公園での事件が報道されていることからも、一筋縄ではいかないようである。

そもそも、日本での都市公園は、計画上の基準を欧米都市を模範として設定したことと、常に行政が主導[*1)]して公園を計画し、デザインし、配置してきた。行政が主導する公園の計画は、欧米都市を模範としつつ、公園とのかかわり方を住民＝生活者に要求してきた。こうした制度としての計画を、ここでは「計画」という概念で位置づけよう。「計画」は規制の形をとって生活者の前に立ち現れ、「計画」が想定する秩序を脅かすおそれのある行為は公園から排除される。そして、「普通の生活を持ち込むことができない」、「日本人の生活様式とは別のもの」として、公園は形づくられてきたのである。

現代社会における公園の位置づけは変化している。例えば、都市部では精神を病む人の増加や、キレる子供の増加が著しいと言われており、その要因の１つが、自然（緑）から離れた都市での生活環境に起因しているとも考えられている。都市公園というものを、都市生活を健康にするための空間として考える必要がある。

さらに、都市環境問題を考えるときに、公園の存在というのは大きな意味があること。緑があることでヒートアイランド現象を軽減し、温暖化防止にも貢献する。この数年、都市洪水により大きな被害を受けている都市が日本国内にもあるが、都市内の公園面積を増やせば、軽減できることはまちがいない。そして、この１年、紙面を賑わした食の安全ということに関しても、「食べられる公園」なども提案されており、実際アメリカのビレッジホームズ[*2)]では、地域内の緑地で収穫したアーモンドの販売による収入を、コミュニティが地域の維持費にあてているだけではなく、地域内の子供たちのおやつは、地域で取れる果物だという。このような夢を与える公園が、都市に存在すれば社会を変えることもできるのではないかと希望を抱き、次世代のための都市公園を提案したい。

2.これからの都市公園

愛知青少年公園は、「愛・地球博」の主会場跡を、サスティナブル・パークとして存続させている。サスティナブル・パークとは、県民と共に成長・進化し続ける公園であるとしており、公園を考える上で重要なキーワードではないか。これまでは、整備をすればよしとされてきたが、ユーザーとともに進化し続ける公園こそ、これから必要とされている。今ある公園が、サスティナブルパークとして再生するためには、

(1) ＜「計画」／「使用」＞という二項関係の無化
(2) 人々の多様な行為を集積していく中での更新

が、必要である。その上で、注目すべき①～③のテーマをあげる。

①都市公園の風を利用したヒートアイランド緩和効果

静寂な夜間に都市公園で、放射冷却によって生成された冷気が、市街地との密度さにより周辺に向かって発散的に流れ出す。この冷気を利用することによって、夏の熱帯夜を緩和する効果が期待できる。

②食べられる公園づくり

ドイツの都市公園の周りには、りんごの木が植えられていることが多い。旅人やおなかのすいた人は自由に食べてもいいという。また、イギリスの公園の散策道には、ブルーベリーの垣根がある。世話をしているのは、公園に隣接住宅に住む住人。自由に食べてもいいが、世話をしている人とのコミュニケーションが求められる。国内でも京都の御所には、銀杏並木あり、秋になると銀杏を拾う人でにぎわう。“ 食べる ”という

行為により、新たなコミュニケーションが生まれ、喜ばれることは、公園の理念として必要なことではないか。

図１　グラスパーク＊3) 配置図

③立体都市公園

平成16年6月に都市公園法の改正によって立体都市公園制度が施行された。これは都市公園の区域を立体的に定めることができる制度で、市街地中心部では、ヒートアイランド現象の緩和、地震災害時の避難場所の確保、人々の憩いの空間確保等の観点から、特に都市公園の整備を必要としている。この制度で都市公園の下部空間、建物の屋上や人工地盤上に都市公園が設置することが可能となった。現在、日本には立体都市公園の事例はない。しかし、横浜市では平成21年春の完成を目指して（仮）アメリカ山立体都市公園＊4) が計画されている。

3.広島市中心地への立体都市公園の提案

上幟町公園のある広島市中区上幟町は、広島の都心・八丁堀から徒歩５分の立地とは思えない、落ち着いた街である。広島国際大学や広島女学院、幟町小学校・中学校など教育施設が多く位置するところで、県立美術館や、北には縮景園、1km 東には広島城も位置しており、文化的景観的に良い地域とされている。

図２　上幟町公園の所在地

図３　上幟町公園の夏（左：８月）と冬（右：２月）の景観

しかし、その公園は、地域住民のみならず、この地域に通学・通勤している人々にもあまり活用されていない。この公園を多層緑化型文化公園とすることで、周囲の緑とのネットワークのみならず、近隣の教育・文化施設との連携できる公園へと進化することを提案する。１F がスポーツのできるフィールドパーク、２F は癒しのカフェ、３F は農耕参加型のコミュニティパークとする。そして、公園のコアは、各階とも図書館となっていて、公園内で閲覧できるものとする。また、カフェでは、市民グループ講座の開講やイベントに利用できるものとし、コミュニティーパークでも、高齢者を対象とした園芸療法などを展開するようなプログラムも提案したい。

図４　上幟町公園における多層緑化型文化公園の提案

4.まとめ

日本における都市公園は、地域に定着しているとは思えない。また、公園が計画された当初から社会状況も変化し、求められる公園のあり方が変わってきている。今の世の中では「癒しのサスティナブルパーク」が求められていると考える。その姿は、今世紀型の公園として立体都市公園が望ましいと考える。そこで、広島市中区にある上幟町公園を、サスティナブルパークに再生する提案を行った。

註

＊1) 1873 年の太政官布告以来、制度の中で公園が整備されてきた。1888 年の東京市区改正条例でも公園が指定を受けたが、これまで開設された公園と同様に、その多くはかつてより庶民から親しまれていた遊観所を行政的に追認したものであった。1956 年には都市公園法策定により、公園整備などが体系化された。

＊2）ビレッジ・ホームズ（Village Homes）：1973 年 M&J コルベット氏によって計画されたカリフォルニア州デイビス市に実在する環境共生型住宅地。

＊3）グラスパーク：ドイツの食べられる公園。

＊4)「元町・中華街駅」を増改築し、隣接するアメリカ山敷地と一体的に「アメリカ山公園」として整備を行う。駅舎増改築部分の貸室部分は、飲食・物販施設などとして運営、屋上部とアメリカ山敷地を園地として整備する。

参考文献

[1]　アルバート・ファイン『アメリカの都市と自然・オルムステッドによるアメリカの環境計画』東京井上書院，1983

[2]　新谷洋二・越澤明『都市をつくった巨匠たち・シティープランナーの横顔』株式会社ぎょうせい，2004

[3]進士五十八『アメニティ・デザイン』株式会社学芸出版社，1992

[4]広島市都市計画都市政策部都市政策担当『広島市緑の基本計画』広島市，2001・・・他